



新研究所の発足にあたって

理事 研究所長 迫 村 寿 男

先般の機構改革により当社の研究所は、所内運営と情報活動を担当する総務室と総合評価機能を受持つ第一研究部、プロセス開発研究を行う第二研究部および第三研究部の一室三部制で新しく発足いたしました。

新しく独立した開発研究部と新設の商品研究所に工業化商品化の比重を移し、新研究所は本来の任務である本質的研究からの新技術開発を要請されることになりました。

最近の傾向として企業の企図する目標に対しては研究開発もプロジェクトシステムによって強力に短期間に行わねばならず、技術導入であっても何らかのプラスアルファを附した製品を出すことが必要となつてまいりました。しかもこれ以上に重要なことは国際競争に対処する本質的技術力の蓄積であります。

技術輸出の成立、外国特許の成立をもって国際水準達成の基準とするならば、当研究所にもその水準に達しているグループは少くありません。しかしこれからの化学工業技術はつねに世界市場を意識しなければなりません。したがって各研究部各グループ共この水準を目ざして精進せねばならぬと思えます。本質的な独創的な研究の重視される所以であります。

独創的研究の出発点は何でありましょうか、それは問題発見であります。すべてのものは現実のものとして創られる前に誰かの頭脳の中に観念として形成されるという意味において、問題を自らつくる積極的姿勢が研究者には要請されます。もちろん、販売活動をやる者はその中から、生産活動を担当する者は生産の場から、情報活動を行う者は文献調査の中から問題発見の機会があります。また、そうすることが積極的技術者の道でありましょう。しかしこれらの場合は、積極的でなくても問題は先方から飛込んでくる立場にあります。研究者は研究の中で問題発見を自ら行う以外に生きる道はありません。積極的態以外に存在意義がないというきびしい立場にあります。

まことに研究者こそ研究所の最大の資産であり研究所のすべてであります。研究者のためによい環境を維持し、研究者に思う存分仕事をさせることこそ研究所運営の鍵でありましょう。

科学技術はますます複雑となり高度となつてまいります。研究所は多くの分野の技術に生きる多種多様な人材を必要といたします。これらの人が自由闊達にその力をフルに発揮できる場、そんな研究所でありたいと思えます。

人を生かすこと、人が技術に生きること、これが研究所の理想であります。

研究部門に対するトップス並びに各部門の方々の一層のご指導ご支援をお願いする次第であります。